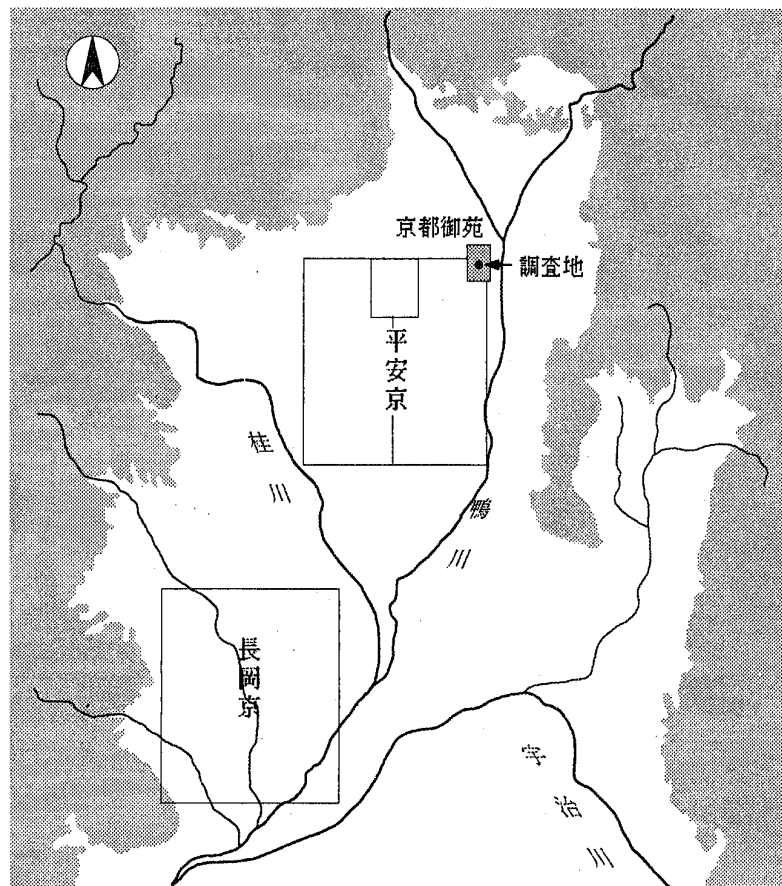


平安京左京北辺四坊
—京都御所東方公家屋敷群跡—

発掘調査現地説明会資料 2



1998年10月24日

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京北辺四坊—京都御所東方公家屋敷群跡—発掘調査現地説明会資料 2

場 所	京都市上京区京都御苑3 (ゲートボール場跡地)
期 間	1998年8月27日～継続中
調査面積	約1,050m ²
調査主体	(財)京都市埋蔵文化財研究所

調査の経過

本調査は、京都和風迎賓施設（仮称）建設予定地の第2回発掘調査である。調査地は建設予定地の東北地区である。西北地区は第1回発掘調査を現在継続中である。第2回発掘調査は1998年8月末に開始し、現在に至っている。調査の進行過程で、江戸時代後期の公家町に関係した遺構群が良好に残されていることが判明した。

調査地の歴史的環境

調査地は、平安京左京北辺四坊八町にあたる。この八町は一条大路と東京極大路に接し、平安京の北東隅に位置している。

平安時代前期には宇多法皇の妃の藤原^{よしこ}褒子の「京極院」に比定されており、褒子の兄である藤原^{あきただ}顕忠の邸宅もこの北西1/4町にあったとされている。

平安時代後期には藤原道長の妻^{ともこ}倫子の本願である「西北院」の敷地になっている。法成寺^{ほうじょうじ}の火災時に「西北院」も類焼したため、延久4年(1072)に藤原頼通がこれを八町の地に再建供養したとされる。室町時代中期には、「酒屋」などの居住が知られ、町家化していたとみられる。

桃山時代には豊臣秀吉により禁裏（御所）周辺への公家衆の集住化が計られ、公家町が成立している。江戸時代初期に徳川家康による禁裏拡張事業に伴い、公家町も地割りの改変が行われたが、その後、宝永の大火まで大規模な変更はなかったとみられる。

宝永5年(1708)の大火では、禁裏をはじめ公家町が焼失して、これを機に、禁裏周辺や公家町の区画を含めた地割りの大幅な改変が実施されている。その後約80年を経た天明8年(1788)に京都最大の火災が発生し、禁裏や公家町が全焼している。

また、嘉永7年(1854)の火災では禁裏と西辺公家町は炎上したが、東辺公家町は罹災を免れている。

元治元年(1864)の禁門の変では禁裏・公家町は火災を免れ、明治2年の遷都行幸を迎え、公家衆の東京移転とともに、順次公家町は解体された。

検出した遺構

天明8年(1788)以降とみられる江戸時代後期の道路1・2、溝3～7、建物8・9、築地10・11、その他を検出した。

道路 1 調査区中央で検出した南北方向の道路である。路面幅約6mを測る。路面は小礫を敷き、踏み固めている。踏み固めた面が数面確認されるため、数回の修復を受けたとみられる。

道路 2 調査区東南部で検出した東西方向の道路で、溝3を路面幅で暗渠化して道路1と交差する。路面幅4.5m以上。

溝 3 石組みの溝で、道路1の東側側溝である。溝の掘形幅1.5mを測る。この掘形の中央に幅0.5m、深さ平均0.3mの石組溝を造る。石は2段ないし3段に組む。石材の抜き取られている箇所が見受けられる。石材は花崗岩切石が多く、大型の割石は道路2と交差する暗渠部分に認められる。

溝 4 石組みの溝で、道路1の西側側溝である。掘形幅1.5mで、中央に幅0.5m、深さ平均0.3mの石組み溝を造る。石は同じく2段ないしは3段に組む。やはり石材の抜き取られている箇所があり、この部分は石材を溝内に投棄した状態で検出している。石材は河原石が多い。

溝 5 道路2の北側側溝である。素掘りの溝で、掘形幅0.5mを測る。溝底面は東方向に傾斜する。

溝 6 調査区西側で南北方向に検出した石組み溝である。掘形幅1.0mを測り、中央に幅0.5m、深さ平均0.3mで、1段ないし2段の石材を組む。石材は多くの箇所で抜き取られている。石材は花崗岩割石が多いが、河原石も一部で使用されている。

溝 7 調査区南西部に検出した東西方向溝である。素掘りの溝で幅1.5m以上、深さ約1.5mを測る。第1回調査第1調査区の溝7の東への延長溝とみられる。

建物 8 調査区西側で南北方向に検出した。桁行1.8m（6尺）、梁間5.4m（18尺）を測る。建物西側に1.8m（6尺）の庇が取り付く。南北9間以上を確認した。南側への延伸は現在精査中である。溝4、溝6はこの雨落ち溝を構成したものとみられる。建物の各柱穴は径約0.5m、円形の柱当たり約0.1m、深さ約0.5mを測る。また北側と15m離して南側に南北約5m、東西0.7mの外方向に面を造る石組み遺構を検出した。建物8以前に属した築地基礎部分の可能性はある。

建物 9 調査区東南側で南北方向に検出した。桁行1.2m（4尺）、梁間3.9m（13尺）を測る。南北10m前後を検出した。柱穴は円形で掘形径0.2m前後、深さ0.2m前後を測る。築地10の南北列と重複しており、築地10とは時期を異にするとみられる。建物8の規模をやや縮小した建物といえる。

築地10 溝3の東側に南北方向に列ぶ柱穴列で、柱間1.8m（6尺）、柱穴掘形約0.3m前後、円形を呈する。調査区北部から道路2の手前まで連続する。

築地11 道路2の北側に東西方向に並ぶ。柱穴間隔1.2m（4尺）、柱穴掘形0.2m前後を測る。溝2東端から調査区東側端に至る。

出土した遺物

出土遺物は平安時代の土師器皿、緑釉陶器椀、灰釉陶器椀、凝灰岩片、江戸時代前期の土師器皿、江戸時代後期の土師器皿、陶器椀・鉢、土製品（人形・玩具・泥面子）、焼け壁片、ガラス瓶、瓦（棧瓦・鬼瓦・家紋瓦）がある。

平安時代、江戸時代前期の遺物は、江戸時代後期の遺構に混入して出土した。江戸時代後期の遺物は、天明8年（1788）の大火後に造られた遺構に伴うもので、19世紀前半以降のものと理解している。

調査の成果

現在までの調査で、江戸時代後期（19世紀前半以降）とみられる、「南北道路跡（道路1）」「道路側溝跡（溝3・4）」「東西道路跡（道路2）」、西側宅地内の南北道路に沿った「長い建物跡（建物8）」、東側宅地内南辺で、東側宅地内の南北道路に沿った小規模な「建物跡（建物9）」を検出した。

南北道路は、天保8年（1837）成立の『禁闕内外全図』などに描かれている「二階丁通」とみられる。「二階丁通」は、元和元年（1615）頃に成立した『中むかし公家町之絵図』には調査地のやや東方に描かれている。しかし、宝永6年（1709）成立の『新板増補京絵図』には調査地北辺あたりで鍵型に屈曲し、西に振られて描かれている。このため、宝永5年（1708）の大火後の復興に伴う大幅な区画と地割りの改編が実施されて「二階丁通」が調査地中央へ造り替えられたとみられる。また東西道路の跡は、宝永6年（1709）成立の『新板増補京絵図』に記載される「切通し」とみられる道路で、東側の「梨ノ木通」に接続する。

調査地の「二階丁通」の西側に沿った宅地は「園家」と「富小路家」、東側は北から「高松家」、「山科家」、「堤家」、「甘露寺家」などと江戸時代後期の絵図には記されている。東側の「長い建物跡」は、位置的には「園家」の東裏手にあたっている。また、この柱穴の並びと規模は、環境庁京都御苑管理事務所に現存している「長屋門」と似ている。東側の「建物跡」は、この規模を縮小した細長い建物と推定している。

以上のように、保存されてきた各種の絵図や資料と、考古学的調査で検出された遺跡の対比から、公家町の歴史的変遷が検証されたことは極めて重要な成果といえよう。

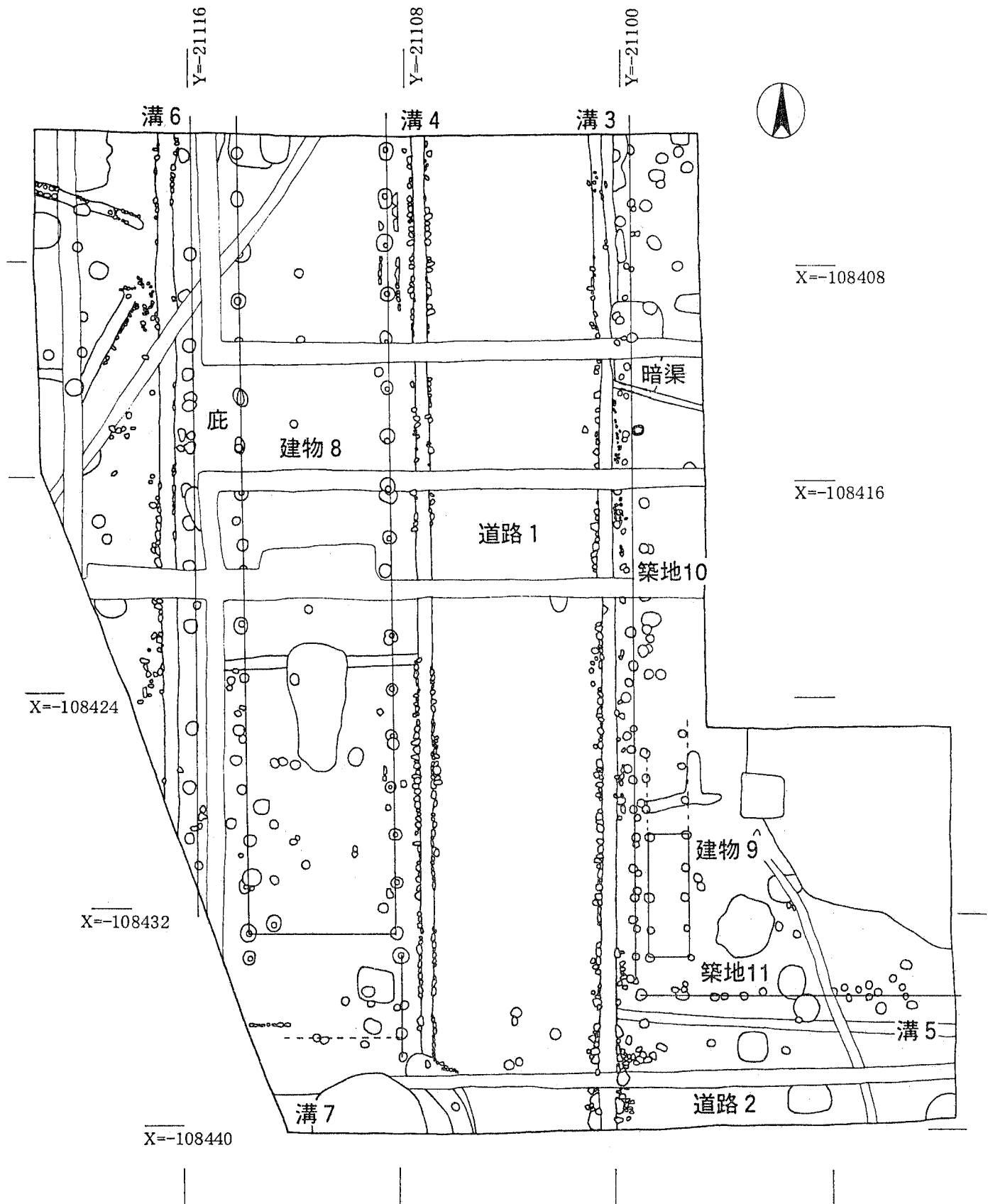


図1 遺構配置図 (1:200)

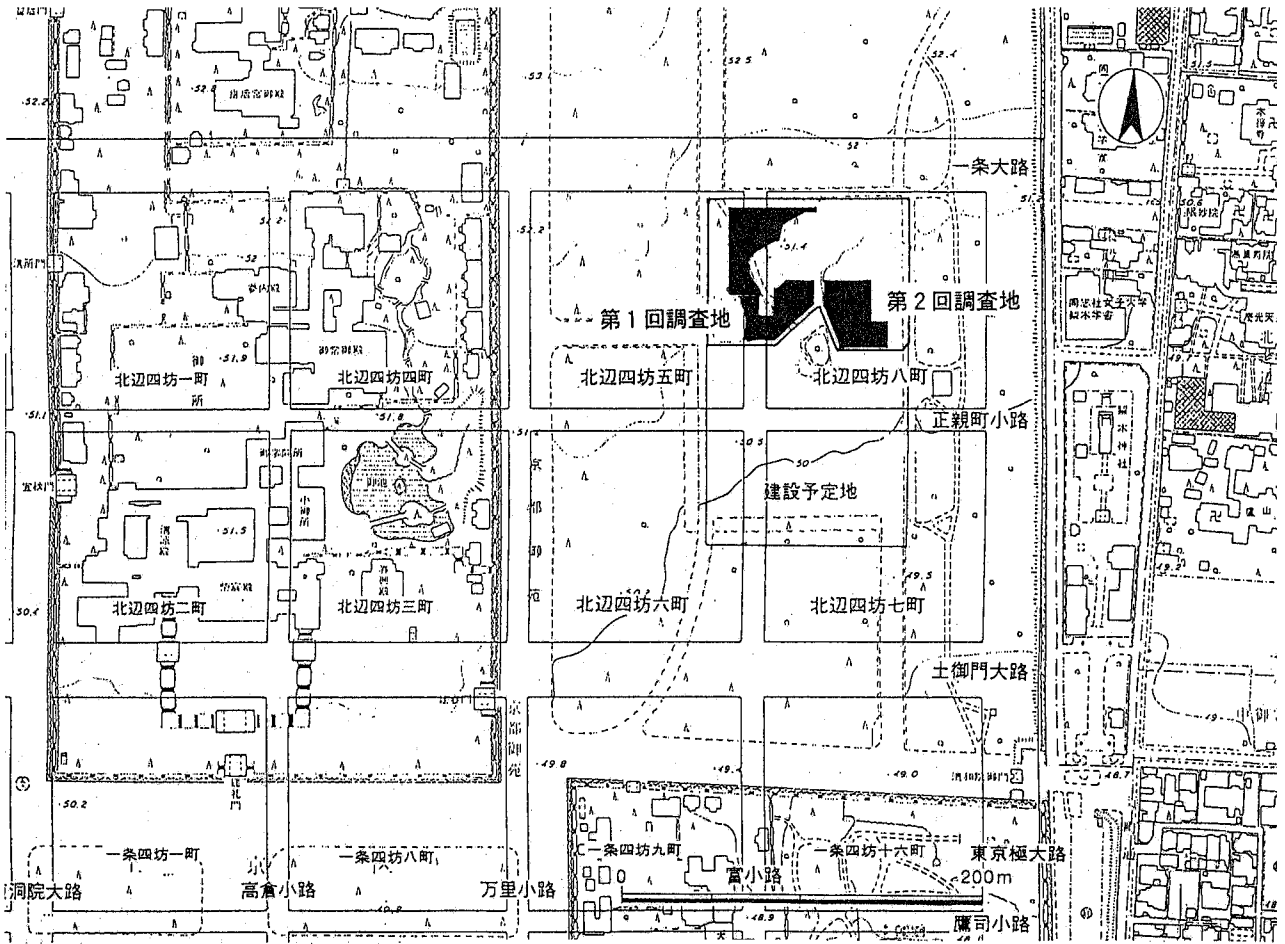


図2 平安京の条坊と調査地

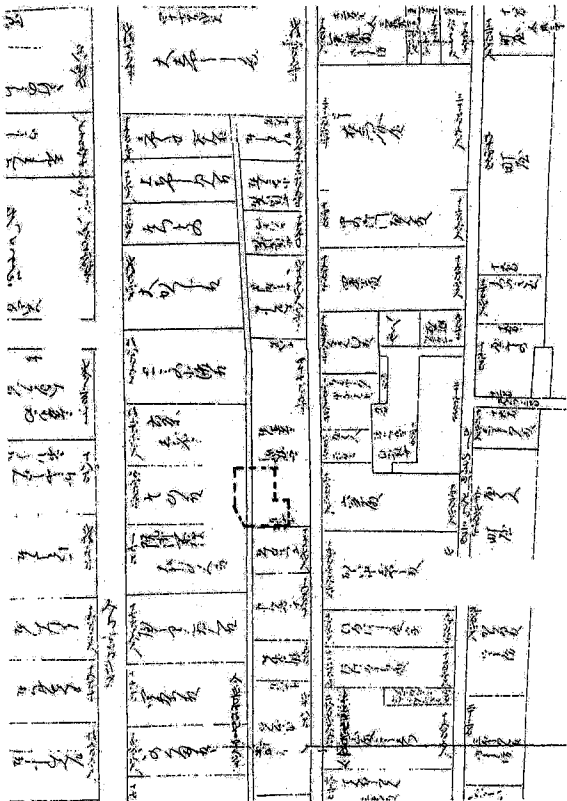


図3 『中むかし公家町之絵図』元和元年(1615)頃の調査地付近(点線内が調査地)

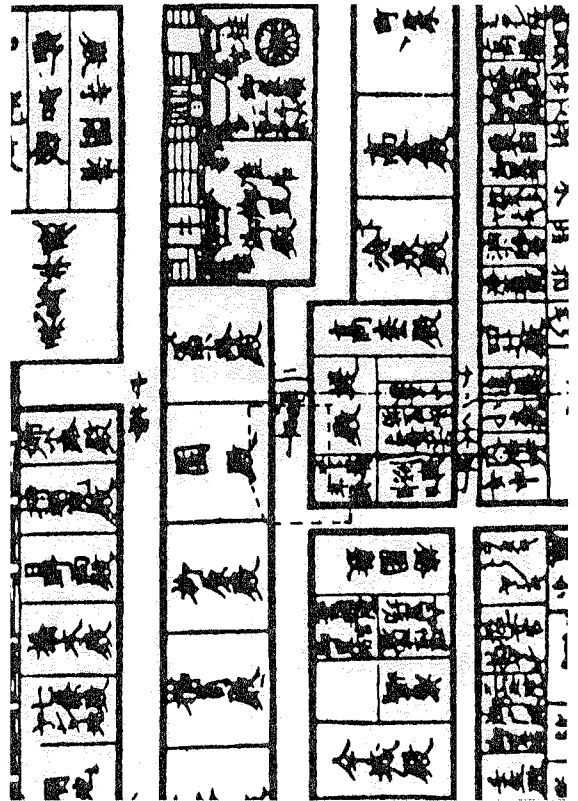
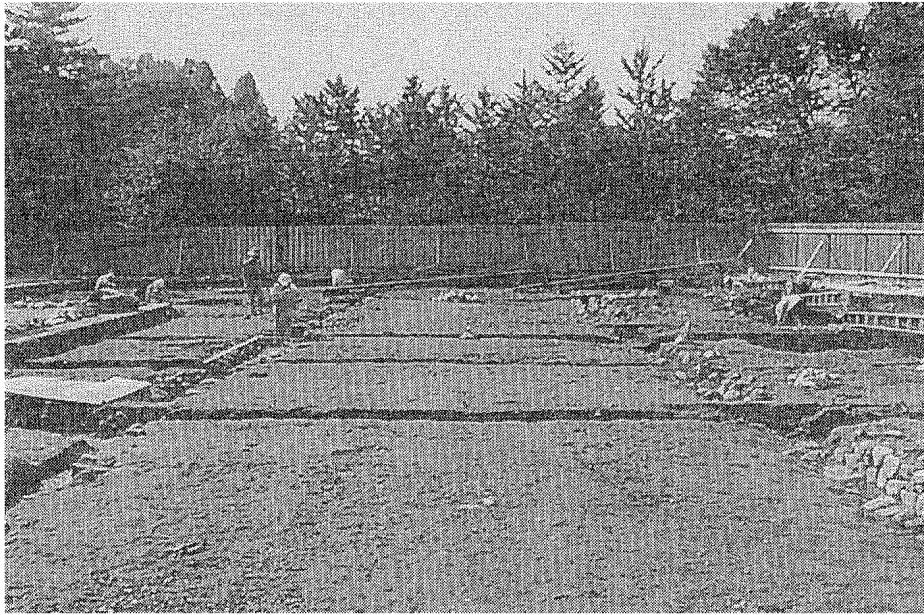


図4 『禁闕内外全図』天保八年(1837)頃の調査地付近(点線内が調査地)



道路1（二階丁通）全景（北から）



溝4（西側溝）（北から）



溝3（東側溝）と暗渠（東から）

平安京左京北辺四坊・京都御所東方公家屋敷街跡

— 第1回調査地、第2調査区の概要 —

1998年10月24日

財団法人京都市埋蔵文化財研究所

経過 第1回調査地では第1調査区を8月前半に終了し、北側で新たに第2調査区（約1,000㎡）の調査を開始した。しかし、第1調査区でみられたような江戸時代の建物遺構は検出されず、かわって江戸時代には土壙が多数掘られている状況が明らかとなった。現在は、それらの遺構を調査中である。

検出した遺構 調査区の中央北寄りには、東西方向の石列678と石垣をもつ溝675がある。これを境に、北側で土壙674、南側で土壙687とした大規模な土壙を検出した。両土壙はゴミ処理用に掘られた穴であり、土師器を中心とする大量の遺物が投棄されていた。出土遺物から、土壙674が先に掘られたことがわかる。前回の説明会資料で「土取穴の連続」と表記したものは、これらの土壙と同じ性格の遺構とみられる。土壙674・687より古い時期のゴミ処理穴が土壙725である。ここからも大量の遺物が出土した。また、調査区全域にはさらに古い時期の土壙が多数掘られており、江戸時代を通じて各所にゴミ処理穴が掘られた様子が判明しつつある。

調査区南端部では、柱穴・礎石列・井戸・集石・通路などを検出した。第1調査区との関係では、溝769が溝72の、溝765が溝213の西側延長位置にある。ただし、溝769はやや南に位置し、溝765は時期が新しい。この他、前回の通路C延長位置には東西方向の柱列が2列あり、通路の遺構は及んでいない。ただし、北側6mの位置に礫を敷きつめた箇所があるため、通路Cが北側に屈曲していた可能性もある。

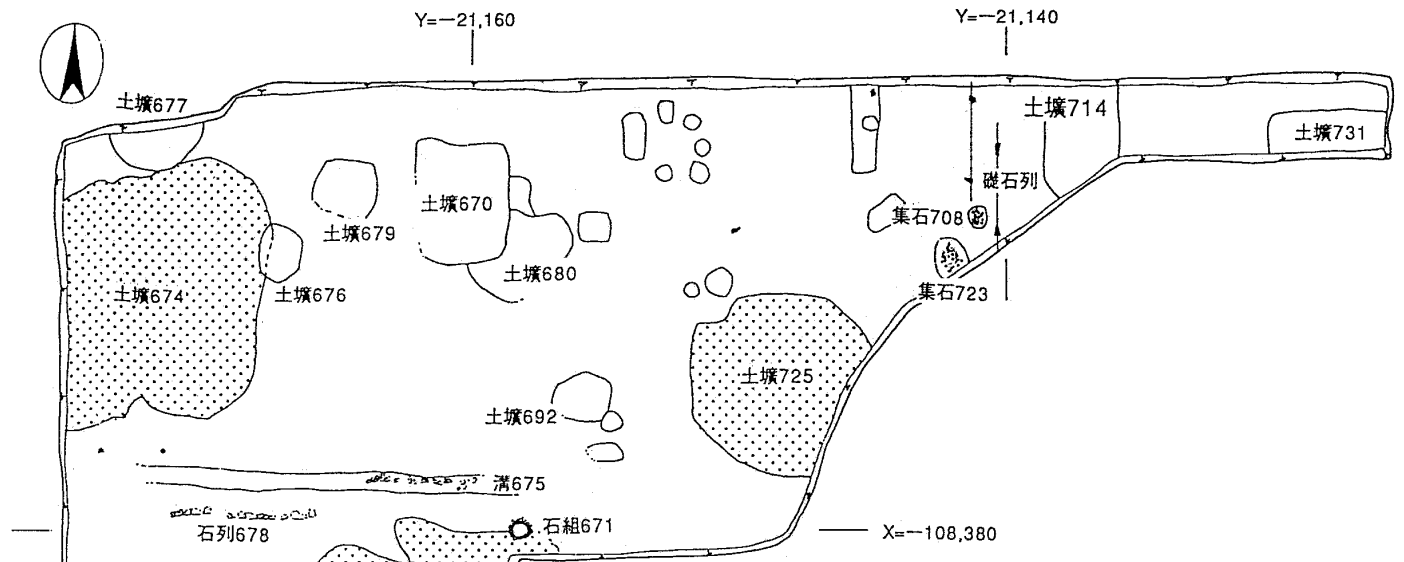
出土した遺物 土壙、土取穴などから、江戸時代の17世紀後半から幕末、明治初期までの各時期の遺物が出土している。大型土壙の出土品は、時期が特定できる一括性の高い遺物であり、今後の整理作業に期待がもてる。種類と内容は次のとおりである。

土壙725（17世紀後半） 土師器（皿・蓋）、土師質土器（椀・小壺・ミニチュア土器）、焼塩壺（京都産・泉州産「天下一堺ミなど／藤左衛門」）、肥前磁器（染付・青磁・色絵・白磁）、唐津系陶器（椀・皿）、瀬戸・美濃系陶器、信楽摺鉢、中国磁器（呉州赤絵・染付）、石製人形

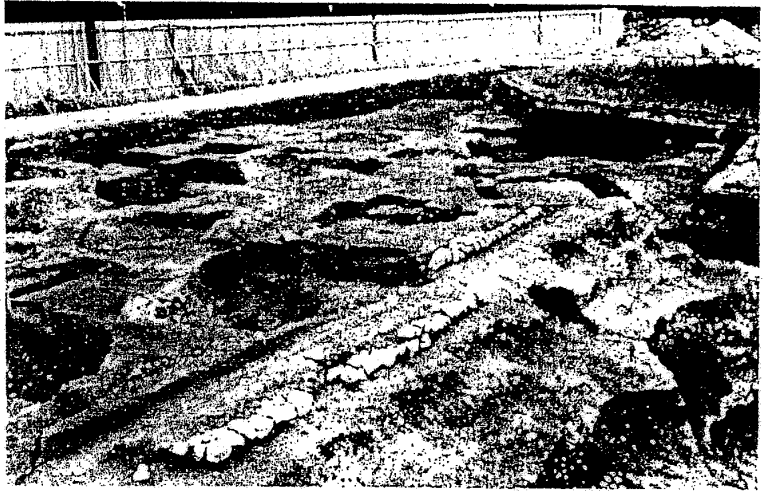
土壙674（18世紀中頃） 土師器（皿・蓋）、土師質土器（焙烙・小壺）、焼塩壺（京都産・泉州産「難波浄因」「泉州麻生」「泉州磨生」）、肥前磁器（染付・白磁・上絵・青磁）、肥前系陶器（京焼風陶器・椀）、瀬戸・美濃系陶器（灰釉・織部）、信楽系陶器、京焼（椀・向付・急須・鬚盥）、土製品（人形・玩具・ミニチュア）

土壙687（18世紀末から19世紀初頭） 土師器（皿・蓋）、土師質土器（風炉・ゴマ炒り）、焼塩壺（京都産・泉州産）、肥前磁器（染付・青磁染付・赤絵・上絵）、瀬戸・美濃系陶器（鉄釉・灰釉）、堺・明石系摺鉢、京・信楽系陶器（染付・鉄釉）、楽焼系陶器、中国磁器、土製品（人形・玩具・めん型）、軒瓦（かたばみ文・抱茗荷文）

その他 銅製品（匙・煙管・簪・蓋・引き手）、銭貨（寛永通寶など）、石製品（硯・臼）、ガラス製品（簪・ホッペン）



写真の方向



石列678 (手前) と石垣をもつ溝675 (奥) を南西から写す。

